



定年後、世界一周ひとり旅

第1回



第二の人生は夢の実現人生だ！

今回から始まるこのコーナーでは、定年後、世界一周ひとり旅に出た熊野讓さんのエッセイを4連載でお届けします。

私は山口県の公立中学校で長年、教師として働いてきました。定年退職前の1年間「退職されたら何されますか？」と同僚からよく聞かれました。すると私は決まっただけのように答えていました。

「僕は再就職しません。おかげさまで、十分悔いなく働かせてもらいました。退職後でないとできない、人生終わるまでにやりたいことが僕にはたくさんあるのです。それはね…」と私は同僚に向かって4つの夢を語っていました。

1番は世界一周ひとり旅に出ること。2番は6年間の大学時代を過ごした京都に戻り、京都の年中行事、洛中洛外の春夏秋冬にどっぷり浸かる単身生活をする。3つ目は、キャンピング・カーを購入し、春桜満開の薩摩からスタートして桜前線を北海道まで追ったら、紅葉前線の南下にあわせて列島を南下する。その間の踏破ルートにある、各都道府県でゴルフを楽しむ。そして最後の夢が自費出版で出したいテーマがいくつかあるの、とりあえず5冊を目標に出版すること。

「どうですか、楽しそうでしょう。面白そうでしょう。4つすべて達成できたら豊かなリタイアメント生活です」と語ると「うらや

ましいなあ。ぜひ実現してください」と励まされたものでした。

しかし、内心これらの夢は、はかない夢で終わるだろうと思っていたのも事実です。

退職準備のライフプランの講座を受講すると「退職後の経済生活は厳しいですよ。退職と同時に普通車を手放し、中古の軽自動車に替えるなど生活のサイズダウンをしてみてください」と、講師が言うのにびっくりしました。数年前にこのセミナーを受講した時、この講師は「定年退職したら豪華客船での世界旅行をおすすめしますよ」と、明るく語っていたのです。

たしかに経済面もそうです（実際、私は地方生活者に欠かせない車を退職と同時に7年落ちの中古の軽自動車に替えました）が、健康面も年相応に体のあちこちにガタが来ています。私は独身ではないので家庭生活も大事にしなくてはなりません。そう考えると、同僚に語った夢はただのホラ話に終わってしまいそうに思えてきました。

セミナーからの帰途、あれこれ考えました。仕事での自己実現という方法がない第2の人生、やはり、生きている実感が欲しい。

セカンドステージの出発点を私の人生の画期とした。

退職後のわが身にさまざまな苦勞が襲いかかるであろう。それらに立ち向かうためにも、ドライバーとスタートしたくない。何かしら挑戦的なことをしたいと気持ちを持ち直しました。

体力面を考慮すると、まずは世界一周ひとり旅の実行だろうとなりました。50歳あたりから海外を旅するようになり、これまでに9カ国旅してきました。どの国に行っても驚きと感動の連続でした。一期一会の出会いの連続でした。世界のあちこちをもっと見てみたい、それも一人で退職数年前から思いが強くなりました。かつて読んでいいなあと思わぬ憧れを抱いた沢木耕太郎の『深夜特急』の文庫本が本棚から私を呼んでいるようでした。

ちょうどそのころ後輩が教えてくれたのが「世界一周航空券」です。1年間有効、合計16回搭乗可能なです。エコノミークラスであればワンフライト2万円（当時）程度と格安です。さらにフライトの変更もOKです。実際にはあれこれの使用条件があるものの、これを使わない手はありません。一気に世界一周ひとり旅が私にも実現可能なものに見



熊野 讓
【くまの・ゆずる】
1953年山口市生まれ。国内外の旅、鏝絵（家の壁などにつくられる漆喰のレリーフ）画像の収集、下手なゴルフを趣味とする部分年金生活者。元公立中学校教師。下関市在住。



パスポート、鉄道チケット、国際運転免許と準備万端



右手首のないサピエル像がマラッカ海峡を見下ろす



多様な文化の融合したマラッカ世界遺産の家並み



がっかりなかしなかったシンガポールのマーライオン



美味しい店には行列。シンガポールのチャイナタウンで



交通標示は色々推理して「クアラルンプールか！」

えてきました。

自分で行程表の作成をしたり、ホテルの予約、ヨーロッパの鉄道切符の予約購入、イギリスでのホームステイと英語学校入学の申込、ゴルフプレイの計画をするなど。パソコン相手に楽しい夜が続きました。

旅の楽しみは何と言っても計画段階です。まだ見ぬ土地への想像が膨らむ、これがたまりません。待ち受けている困難のことなど何も考えていません。春の間に、前の段落に書いた内容を盛り込んだ旅の計画と準備がほぼ終わりました。

現役時代の後半、体力はもちろんですが精神面でも脆く細く弱くなっている自分を自覚していました。このままだとまずいなど

思うほどメンタルヘルスが危機的状況だった時に、ある本で次の言葉に出会いました。

現役を退いた後の人生のことを「余生」と言います。国語辞典には「老後に残された生活」とあります。またこの言葉を「余りの人生」というふうに解釈している方も多いことでしょうか。いずれにしても寂しい言葉であります。こういう感覚があれば、人生の終焉に近づいているという暗い気持ちになってしまうのも、無理もないことでありましょう。

しかし60歳になった時、「私にはもう1回の40年の人生がある。それをまた新しく始めるのだ」とか、「人生経験を積んだ今度の40年のほうが、もっと自由で有意義な人生だ」とかというような発想が出てくれば、60歳以降の

人生を、楽しみなものと感じられるようになります。張り合いも出てくることでしょう。「60歳やそこらでくたびれたり、老けたりしている場合か！」と。

——『シングルになれる人の生活習慣』（梅本晃）著、ゴルフダイジェスト社刊より

人生80年ではなく100年と考えて20歳から60歳までの40年間と同じ新たな40年が待っていると、著者はとにかく前向きです。実際の生活も澁澂はつらつとしている様子に私は元気をもらいました。以前よりはずっと削減された年金や、世の中の何か変だなあと思う動きを考えると、気分は暗くなりがちでしたが、次の40年で何をするか妄想をめぐらすと、気分はぐんと前向きになるのです。